
Unrequited love

夢咲白憧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Unrequited love

【コード】

N9430N

【作者名】

夢咲白憧

【あらすじ】

Unrequited love (片想い)

恋愛＋親子愛？の物語です。

ちよっぴりファンタジックで

少し切ない愛のお話。

∴

君が好き。

でも君は私じゃない違う人を見ている。

∴

君を嫌いになれたら・・・

どんなに楽になれるだろう。

∴

美月ネ・・・

大事なモノ忘レタ気ガスルノ・・・

私の片想い(?) (前書き)

お見苦しい点等多々あると思います。

たぶん更新は不定期になるかと思っています。

また度々修正することもあると思います。

それでも最後までお付き合い頂けたら幸いですm (m

私の片想い(?)

私の新しい日記帳。

私の悩み事も心配事も

楽しい時、幸せな時…

私の全てを受け止めて？

砂原 サハラ 瞬夜 シュンヤ。

私の同級生。

私と同じ高校に通っている。

…ホントは私が瞬と同じ高校に通っているんだけど(汗)

私達が通っている学校は所謂お坊ちゃま学校。

お金持ちのお宅のお坊ちゃまやお嬢ちゃまが通っている。

そんな学校へ私が入学出来ただけでも奇跡だったのかも。

必死で勉強して何とか入る事が出来たんだ。

そこまでする訳、分かるでしょ？

私が瞬の事好きだからよ。

瞬は頭が良い。

だから私はてつきり特進(一番頭良い学科)

か特別芸術学科だと思ってたのに…

瞬はそのどちらにも行かなかった。

他にも様々な分野の学科がある。

国際科、医療科、進学科…

瞬はなぜか私と同じ普通科に入学した。

内の学校で一番レベルが低い学科なのに。

普通科のレベルは他の学校と比べれると中の上ぐらい？

瞬の頭なら他の学科でも普通に行けた筈なのに…なんで？

その理由は未だに謎。

入学してからしばらく経つけど瞬は教えてくれない。
いつも曖昧な答え。

この時、私は知らなかったの。

瞬の秘密を…

私の片想い(?)

一学期が終わり、高校で初の夏休み。

そして、季節は夏から秋に変わるうとしている。

二学期を告げる校内の鐘の音と共に式が始まる。

再び鐘の音が響き渡り、式が終わる。

式が終わると私達はそれぞれのクラスへと戻って行く。

瞬は私と違っていつもクールだ。

緊張することもなくいつも堂々としている。

初めてこの学校に来た時も、試験の時も、入学式の時も…

クラスに戻ると、

瞬はいつもと同じように、

涼しげな顔で自分の席に座っていた。

私は瞬と同じクラスだった。

普通科は全部で五クラス。

名字も同じサ行だから席も割と近い。

入学式の時、私の心の中は大はしゃぎ。

いつも斜め後ろの席で瞬も後ろ姿を見ている。

その後ろ姿が私は好きだ。

届きそうに届かない…大好きな後ろ姿。

「朝海」

彼女は武下タケシタ

朝海アサミ入学してから出来た私の友達。

因みに愛子が私。改めてはじめまして。

私の日記帳。

私は清水シミズ 愛子アイコ

これからあなたとは長いお付き合いになりそうね？

あなたにはこれから私の全てを伝えたいと思うけど、
最後までその愚痴、聞いてよね？

休み時間になるといつものように朝海が私の所にやってくる。

そして他愛の無い会話を二人で楽しむ。

それが私の毎日。

その頃、瞬は大体自分の席で難しそうなお本（小説？）
を読んでいる。

瞬は群れ（友達）をあまり作らない。

（自分からは作らない）

一人が好きなのか…昔からそうだ。

そんなクールな彼だけど、女子からの評判は悪くない。

少し長めの黒髪を靡かせ本を読む姿がとても素敵だ。

正に絵に描いたような光景…

そんな風に思うのは私一人じゃ無い。

その上、頭も良いし、誰に対しても優しいんだ。

だけど、

その優しさが私の胸を苦しくさせる…

他の子に優しくしないでよ…

私だけ…私だけに…
頭が良い癖に、肝心な所は鈍感なんだから。

私の片想い(?)

私の日記帳？

私ね…結構長い間、瞬の事見ているんだ。

でもね、私…

ふと思えば、瞬の事何も知らないの。

何だかそれが寂しくて、時々凄く不安になる。

こんなに好きで、こんなに彼を見てるのに…

何で瞬の事、こんなにも知らないんだろう。

瞬とはじめて出会ったのは…

そう…あの時。

私がまだ小学生の頃。

三年生の時だったかな？

瞬は突然私達の学校にやってきた。

所謂転校生。

今まで海外で生活していたらしく、

ご両親の都合で(一時?)日本に帰国したらしい。

私の家の近所には大きな家あった。

まさか瞬がその家の息子様だったなんて当時は夢にも思わなかった。

それまで、そこには誰も住んでいなかったから。

家が近所だった為か…

一緒に帰る事が多かった私。

瞬とはそれからの腐れ縁って奴で、

私はその頃から瞬に惹かれていったの。

何気ない仕草（優しさ）が私の心を引き寄せる。

…その間一時期、瞬は私達の前から姿を消した事がある。
小学校を卒業すると、

瞬はご両親と一緒に元いた海外へと帰って行ったの。

だけど瞬は、戻って来た。

中学三年。二学期が始まってすぐの頃だった。

丁度今ぐらいの時期か…

ご両親とは別で、瞬は一人で帰って来た。

そして今は僅かなお手伝いさん達とあの家に一人で住んでいるみたい。

あの頃はただ単純に、瞬が戻ってきて嬉しい

なんて思っていたけど、今思えばなんでまた戻って来たんだろう…

私の片想い(?)

「愛子？」

「え？」

「聞いてるの？」

朝海が私に顔を近づけ言う。

「ゴメン…なんだっけ？」

「だから愛子は夏何してたの？って聞いたのよ」

「そっか…」

苦笑いしながら言う私に朝海は少し睨む。

「で、何してたの？」

「中学の友達と海行っただぐらいで、特に何もしてないよ？」

「海いいなあ〜」

「朝海は行かなかったの？」

麻美は頷く。

「プールには行ったけど、海には行ってないや」

「そうなんだ」

瞬はこの夏何してたのかな？

そっいえば私…

今年の夏も、今までの夏も瞬と一緒に過ごした事ない…

夏だけじゃない。春も冬も、長い休みの日は家にはいつもいなかった。

小学生の時はご両親と一緒に海外（前の家）へ行っていたみたいだけれど…

……でも、

去年も今年も、瞬が帰ってきてからの大型連休は家にはいたみたい。

家の外から瞬の姿が少しだけ見えたから。

それからしばらく経つ。

それ等の謎全てが徐々に開かされて行く。

瞬？

私を見て？

私だけを…

彼の秘密（？）

ある日、瞬が学校を休んだ。
家が近所の為、私は学校からの手紙なんかと一緒に
瞬の家へお見舞いに行った。

瞬の家の前。

相変わらず大きな門。

昔（小学生の頃）何度か友達と遊びに行った事があるけど…
庭だけで私ん家…入りそうだ。

門の傍にある呼び鈴を鳴らす。

呼び鈴のスピーカーからお手伝いさんの声がする。
私は事情を話すと門の扉が開く。

『どうぞお入りください』

その声で私は門の中へと入る。
門から家の玄関口までかなり距離がある。
玄関口まで庭の中心の石畳の上を歩いて行く。

瞬の家の庭…

昔と変わらない。

綺麗で…大きくて素敵なお庭。

ホント…私何かとの一般庶民とは住む世界が違う。

庭はお手伝いさんがいつも手入れしてある。

辺りはまるでお花畑のよう。大きな池もあるし、

木で出来たブランコや砂場まである。

「……」

私は足を止める。

…

あの砂場…最近誰かが使ったのかな？

砂で出来たトンネルやバケツにスコップまである。

瞬？……まさか…瞬がそんなことするわけないし…

「……」

そんな事を考えながらまた足を進める。

そしてやっと辿り着いた。

私は再び玄関口の呼び鈴を鳴らす。

しばらくするとドアが開く。

彼の秘密(?)

開いたドアの向こうには瞬がいた。

「愛？」

「瞬大丈夫？…風邪だつて聞いたけど」

「大丈夫だよ…わざわざ来てくれてありがとう」

瞬がそう言っていると私は届け物を彼に手渡す。

「明日は学校来れそう？」

「うん…たぶん行けるよ」

「そっか…」

よかった。

瞬の声。いつもと同じだ。

顔色も悪くないし…

顔が見れてホッとした。

「じゃあ用も済んだし…私そろそろ…」

ホントはもっと一緒にいたいけど…

明日は元気で学校へ来てほしいから、

今日は我慢して帰るね？

「そう…そこまで送ろうか？」

瞬が私に言う。

「え…」

ちよつとだけ胸がドキドキした。

高鳴る鼓動を押さえながら首を横に振る。

「大丈夫」

「そう？」

「うん…風邪、振り返ったら大変だよ？」

「…そうだね」

瞬が申し訳そうにそう言った。

「でもありがとね？」

瞬は首を振って言う。

「こっちこそ、わざわざ来てくれたのに何も出来なくてゴメンネ？」

瞬は優しい。

「来てくれてありがとう」

でもその優しさに己惚れたら駄目なんだ。

それがなんだか…ちよっぴり切ない。

「じゃあね…」

そう言って私はドアを締めよとした。

ドアが閉まるホンノ僅かな隙間から

「瞬ちゃん」

誰かの声が漏れる。

扉はそのまま閉まる。

彼の秘密(？)

…誰？

今のは…

閉まったドアの前で私は足を止めていた。

一度閉めたドアを私は再び開ける事が出来ない。

でも…この壁の向こうに瞬の他に誰がいる……

…お手伝いさん？

違う…

お手伝いさんなら『瞬ちゃん』なんて呼ばない。

瞬は今一人じゃないの？

…

その後どうやって家まで帰ったのか、

あんまり覚えてない。

知りたい…声の主。

気付けば翌日。

その日も瞬は同じ理由で学校を休んだ。

『ウソツキ…』

昨日は来るって…言ってたじゃん。

瞬のバカ。

先生もバカ。

また私に瞬への手紙押し付けないでよ。

なんか…私だけ気まずいじゃんか…

でも…昨日の声の主。

わかるかも…

瞬…知りたいよ

瞬の全てを…

パパは高校生！？（？）

昨日と同じように私はあの門の前に立っていた。

呼び鈴…押したくない。でも…

押さなくっちゃ…

顔が妙に引き攣る。

私…何ビビってるの？

先生から預かった物、渡すだけじゃない。

『愛子！勇気を出すのよ』

‘ピーンポーン’

…押した。

私は恐る恐る、呼び鈴の上から指を放す。

昨日と同様お手伝いさんがスピーカ越しに対応する。

そつよ。別に女と二人きりで同棲してる訳じゃないんだし…

別に気にすることなんかないのよ。

門が開き中へ入って行く。

…

私の足が止まる。

そして目をパチクリさせる。

一旦、目を逸らし再び同じ方へ目を向ける。

『…なに…あれ…』

石畳から軽く離れて見える砂場。

そこには今まで見た事の無いような光景があった。

そう。

きつと昨日の声の主…

まだ幼稚園児ぐらいの小さな女の子が
砂場で遊んでいたのだ。

パパは高校生！？（？）

私の新しい日記帳。

私：今まで何してたんだろう？

私：瞬の何を見てたの？

瞬にとって私って何？

やっぱり唯の顔見知り程度と同級生？

瞬…

私…私ね？

瞬の事なにも知らなかったけど…

私ホントに…

瞬の事好き…大好きなの…

だから…瞬の秘密も何もかも護るよ？
護るから…私に全てを教えてよ。

パパは高校生！？（？）

「なに…あの子？……」

女の子が私に気付いた。

『近所の子？』

目を大きくさせてこっちを見ている。

『…違う。あんな子見たことない』

その時砂場の奥から声がした。

「美月！」

女の子は声の方に顔を向ける。

今の声…

「ここにいたのか…」

やっぱり…

「寝てないとまた熱が上がるよ？」

「瞬ちゃん」

瞬…

瞬は女の子の方へ近寄って行く。

そんな瞬に近づき、女の子は瞬の服の裾を掴み私の方へ指を指す。

その指を目で追い瞬は私に気付く。

瞬の顔…

一瞬だったけど、私は見逃さなかったよ？

私を見て、ちよっとだけ焦ったような顔をした。

「愛…どうして?…」

私はゆっくり瞬の元へ近づいて行く。

私が近寄ると、女の子は瞬の後ろに隠れる。

「また先生から手紙とか預かって…」

そんな女の子を気になりながらも、

何事もなかったかの様に振る舞い、

昨日と同じように瞬に手紙を手渡す。

「ありがとう…」

「風邪は大丈夫?」

違う…

瞬は風邪を引いてない。

風邪を引いたのはたぶん…この子…

そんな風に思いながらその子を目で微かに見る。

その僅かな目線を気づき、微かに私を見ていた

女の子は再び瞬の後ろへ隠れる。

瞬と私の間に変な沈黙が流れる。

「…瞬?」

やっぱり…

「なに?」

このままモヤモヤするのは嫌だな…

「瞬…その子は?」

少し笑顔（苦笑い?）を向けながら言う。

「……」

瞬は少し黙り、口を開かる。

「ちよっと……預かってるんだ」

「預かってる？」

「うん……」

「どこの子？」

私がそう聞くとまた瞬の顔が一瞬変わった。
後ろめたそうに……

「……知り合いの子だよ……」

「……たぶん愛は知らないと思うよ」

「そう……」

「……もしかして私……」

「………そっか」

一瞬泣きそうになった。

でも私は笑顔で言った。

そして私は瞬から逃げた。

「……お嬢ちゃんお名前は？」

瞬も目から視線を逸らし女の子に視線を移しかえる。

恥ずかしがり屋なのか無口なのか瞬の後ろに

完全に隠れて動かない。

そんな女の子を見て瞬は腰を落とす、

その子頭に軽く手を当て言う。

「美月……」

美月？……それが、その子の名前？

パパは高校生！？（？）

「美月…」

瞬がそう言くと女の子は

瞬に隠れながら細かい声で言う。

「夜星 ヤホシ 美月 ミヅキ…」

「美月ちゃん？」

私が聞き返すと美月ちゃんは頷く。

「今何歳？」

「…3才」

「今年で4つになるんだ」

瞬が美月の頭に手を置きながら言った

「そう…」

「どうしよう…会話が…」

私がそう思っていると

置いていた手で彼女の頭を優しく撫でた。

「よくできました」

優しい笑顔を向ける瞬。

瞬のそんな顔…初めて見たかも。

瞬…瞬もそんな顔するんだね？

「美月ちゃんは日本人なの？」

名前からして日本人ぽいけど…

美月ちゃんの頭は向日葵のように明るい黄色。
でも瞳は黒色…

「…ハーフかな？」

「かな？」

私はなんとなく、その言葉が妙に引っかかった気がした。

「愛、用事はもう終わりかな？」

「え？…うん」

やっぱり私…

「悪いけど美月をそろそろ寝かしたいんだ」
…迷惑なのかな？

そう言うと瞬は美月ちゃんを抱き上げる。

「そっか…もしかして風邪引いたのって…」

「うん…美月の方なんだ」

「…」

「愛？」

「え！？…なに？」

「なんか…色々ごめんね？」

「何が？」

「いや…なんとなく…」

瞬…

「…あの…この事は…」

「誰にも言わないよ？」

「……ありがとう」

瞬？

私は瞬のなに？

私…瞬の秘密護るから…

私…

次の日、瞬は二日ぶりに学校へ来た。

ハジメテ(?)

「では、これから願います」

「わかりました…美月ちゃんこれからよろしくね？」

これは少し前の話。

そう…僕が再び日本へ戻って来てすぐの頃。

美月を連れてある保育所へ向かった。

僕も学校がある為、日中は美月を見てくれる人がいない。

お手伝いさんはいるけど、

これ以上、彼（彼女）等には迷惑掛けられない。

それにこれは僕自身で決めた事だから。

彼女は僕が護ると…

美月はまだ人との繋がりをよく知らない。

ここ（保育所）に来たのは、

美月にとってもいい勉強になると思ったから。

美月がここで上手くやっていけるか…

正直、不安な面も沢山あった。

「美月？…先生のお話をよく聞くんだよ？」

僕がそう言つと、美月は不安そうに僕を見上げ、軽く頷く。

そしてこれが、今日からの僕の日課の一部になるだろう。

ハジメテ(?)

引き戸を開けるとワイワイと騒がしい。

「はい。皆席について?」

大きな声でそう言い、先生は手を叩きながら奥へと入って行く。

「今日はまず始めに、皆に新しい友達を紹介します」
辺りが微かにザワメク中、先生は話を続けた。

「今日から皆と同じクラスの間になる、夜星 美月ちゃんです」
先生が美月を紹介すると教室内は、また騒がしくなる。

「しーずーカーにー!」

「……じゃあ美月ちゃん?皆にご挨拶して?」

先生がそう言うのと美月は下を向きいたまま動かなかった。

「……………」

そんな美月の代わりに先生が言った。

「美月ちゃんはこの間まで海外の方で暮らしていました。
だれどご両親の都合で、ここで皆と一緒に生活します。

だから分からない事とかもたくさんあると思うけど、
皆仲良くしてあげてね?」

「はい」

先生がそう言うのとクラスの子供たちは一声に大きな声で返事をした。

「美月ちゃんはじめまして」

「?」

「あたし、のんちゃん」

「ノンちゃん?」

「うん さとう ののか(佐藤 希華)」

だから、のんちゃんって呼んでね？」

「ノンちゃん…」

それが美月に出来た初めての友達。

その後しばらくして、他の子供達も数人集まってくる。

美月の容姿は、まだ小さな子供には珍しかったのだろう。

初めての沢山の人達に囲まれ戸惑う美月だったが、

何事もなくこの一日は終わった。

ハジメテ(?)

翌日。

「美月ちゃん遊ぼう。」

のんちゃん達が美月に声を掛けてきた。

「遊ぶ?... ツテ何?」

「え?」

「遊ばってわからないのかなあ?」

「日本語だからかなあ?」

「英語で何て言うの?」

「わかんないよ」

「?」

美月は不思議そうな顔をする。

「のんちゃん達これからお外でブランコするんだ」

「ブランコ?」

「うん だから一緒においでよ?」

ブランコの前。

「美月ちゃんこれがブランコだよ」

のんちゃんがブランコを指し美月に教える。

「ブランコ...」

「のんちゃんが後ろから押してあげるから美月ちゃん乗ってごらんよ?」

美月は訳が分からないまま女の子の言われるままブランコに乗る。

それが美月にとって初めてのブランコだった。

「美月ちゃん楽しい？」
「…楽しい？」

美月にとって何でもない言葉ひとつひとつが新鮮だった。

美月の頭の中で文字が浮かび上がる。

【楽しい…、ワクワク、スルコト…】

「美月ちゃん？」

「うん…」

その言葉でのんちゃんは笑顔になる。

「ならよかった」

「…？」

でも美月はその笑顔の理由が分からなかった。

「ねえ美月ちゃん？次は飼育小屋見に行かない？」

「飼育小屋？」

「動物さんがいっぱいいて、可愛いんだよ」

再びのんちゃんに言われるまま飼育小屋まで連れて行かれる。

「うーちゃん」

美月は目を大きくさせて言う。

「美月ちゃんウサギさん好きなの？」

【好き…、ドキドキ、スルコト…】

「うん…」

「のんちゃんも」

美月は目で何かを追う。

そして指を指して言う。

「egg…」

「エッグってなに？」

「egg」

「？」

再び指を指し言う。

のんちゃんは不思議そうにその先を見る。

「あ！」

のんちゃんは驚いた顔をして先生を呼ぶ。

「先生」

「のんちゃんどうしたの？」

その声で先生達や他の子供達が駆け寄ってくる。

「にわとりさん…」

先生はのんちゃんが言う方を見る。

「あら？あの卵…」

「動いてるわ！」

そう。まさに今、雛が生まれようとしていた。

卵が揺れ徐々に罅割れていく。

「ピーピー」

美月が指を指して言う。

罅割れた部分から雛が顔を出し始めた。

生き物が産まれてくる様を初めて目の渡りにする子供達。

それは感動的なものだったに気がないだろう。

それは美月だって例外じゃない。

学校が終わり、迎えに来た時先生から聞いた事だった。

美月をここに連れて来てよかった。

そう改めて思った。

美月に、新しいものを沢山見せてあげられたから。

それから徐々に…少しずつだけど、
美月は楽しそうに生活している。
このまま何事もなく終われば…
そんな甘い事を、その時僕は想った。

寄り道(?)

『私は月になりたいの…
いつまでも変わることなく、
永遠に輝き続ける、あの月に…』

「…ン？」

「…瞬？」

「…え？…愛？」

「大丈夫？なんかボーっと、してたみたいだけど？」

「…ゴメン…大丈夫…」

瞬…

「ゴメン…ちょっと頭冷やしてくる」

そう言つて瞬は教室を出ていく。

「瞬？」

どうしたの？

あんな瞬、初めて見た。

授業が始まる一分ほど前、瞬は戻つて来た。
いつもと同じ冷静な姿で。

瞬は何事もなかったかのようにそこに座る。
それをいつもの特等席で見守る私。

瞬…悩み事があるなら私、いつでも聞くよ？
あまり役に立てないかもしれないけど…

その放課後。

あの日から少しだけ、瞬に触れるのを戸惑う私だったが、
勇気を出した。

瞬がこっちへ帰って来てからの、はじめての言葉。
なんか可らしいよね？

「瞬？」

小学生の頃は何の躊躇いもなく言えた言葉なのに、
年を重ねると妙に恥ずかしく感じるなんて…

「愛？どうしたの？」

帰る仕度をしていた瞬に、

「今日さあ…久しぶりに…」

頬を火照らせ言う。

「？」

「だから、今日…」

だけど、肝心な言葉が出てこない。

「…い…一緒に…帰らないかな…て…」

…声が裏返っちゃった（汗）

瞬は少しビククリしたような顔をしていた。

「…」

瞬は少し考えているみたい。

なんか…この妙な緊張感が嫌…

穴があつたら入りたいよ。

「いいけど…」

「え？」

…いいの??

「あ…でも……」

やっぱ……

「？」

駄目…ですか？

瞬は辺りを軽く見回すと、耳元で言った。

「途中、寄り道に付き合ってくれるなら…いいよ」
単純なのか、私は急に嬉しくなって

「いいよ？それでもいい」

笑顔でそう言った。

瞬との寄り道なら…

私、どこだつてついて行くよ

「ありがとう」

瞬が言った。

“ありがとう”

それはこっちの台詞だよ？

瞬…やっぱり大好きだ。

私の心の中は、久しぶりに暖かくなった。

寄り道（？）

学校の帰り道、瞬の後について行く私。
瞬の寄り道の場所。それは…

「ひかり保育園？」

「美月を迎えに来たんだけ」

「そうなの…いつも瞬が迎えに来てるの？」

「うん」

…なんで？

「すぐ終わるから、待ってて？」

「わかった…」

そう言っただけは園内に入って行く。

何でわざわざ瞬が迎えに行く必要があるの？

お手伝いさんもいるんだし…別に瞬じゃなくても…

…

今、改めて思うと、何で瞬はあの子と一緒にいるの？

‘預かってる’って瞬は言ってたけど…瞬はまだ高校生なんだよ？

なんで瞬なの？…瞬のご両親は外国にいらんでは？

それなのに…何で？

私の中で数々の疑問が浮かんだ。

その答えを私を知る時が来るのだろうか？

その答えが、‘とんでもない’事だった何て…

私は知る筈もなかった。

それは…瞬とあの子の哀しい過去。

寄り道（？）

瞬があの子を連れて戻って来る。

私に気付いたあの子は、あの時のように瞬の後ろに隠れるように顔を出す。

そんな彼女を見て、私は話しかけた。

「美月ちゃんこんにちは？」

「……」

美月ちゃんは私を警戒しているのか、その場を動こうとしない。

「美月？」

瞬のその一言で、要約反応する。

瞬を見上げ、恐る恐る前へ出る。

「コンニチワ……」

微かに上（私）を見上げ、小さな声でそう言う。

そんな彼女に、あの日と同じように頭を撫で笑顔を向ける瞬。

その笑顔が、さっきまで考えていた沢山の疑問を更に疑問にさせる。

そしてまた歩き出す。

いつもの帰り道。

長いような短い道のり。

気づけば瞬の家の門の前に立っていた。

まだ一緒にいたい。

そう思っていた私に、瞬が声を掛けてきた。

「愛……この後用事とかあるの？」

「え？」

私の想いが届いたのか…

「もし暇なら、ちょっと寄って行かない？」

「…いいの？」

「うん」

瞬？

私、瞬の事良く分かんない事、多いんだけど…

瞬の事、好きでいてもいいよね？

瞬は何とも思っていないのかもしれないけど、

私、バカから、その何気ない一言に、凄くドキドキしてるの。

ホンノ僅かの可能性でも、私は期待しちゃうよ？

想い出

久しぶりに瞬の家の中に入った。
庭と同様。相変わらず変わってない。
広くて、豪華なお家（屋敷）。

瞬の部屋のベッドも変わってない。

昔と変わらず大きなベッド。

大人が、軽く三人は入れそうなフカフカのベッド。

以前、遊びに来た時。皆（五人）でこのベッドに乗り込んだ。

あの時は何が可笑しかったのか、それで皆笑ってた。

…でも、そんな時瞬は、この窓から空を見上げていた。

あの時、瞬は何を思っていたのかな？

今でも、この窓から空を見上げてるの？

…

なんだか懐かしい…

そんな事を思っている内に、

瞬と美月ちゃんが着替えを、終えて戻ってくる。

瞬は私を見て言った。

「そんな所で突っ立って、何をしてるの？」

その時の瞬の目は、少し優しくかった気がした。

そんな瞬のせいなのか、思い出のせいなのかは、
分からないけど、嬉しくて自然と笑顔になった。

「なんだか懐かしくて」

「そう?」

「うん 今思い出に浸ってたところなの」

あ…

「そう」

また、瞬が軽く微笑んだ。

瞬はあまり笑顔を見せないから、それがなんだか特別に見えた。

(愛想(表面)笑いはたまにするけど…)

今日はちゃんと目が笑ってる。

その吸い込まれるような優しい目が、私は好き。

オレンジティー

「コンコン」

ドアからノックの音がした。

「どうぞ」

瞬がノックに答える。

「失礼します」

ドアが開くとメイド姿の女性が中へ入って行く。

「お飲み物をお持ちしました」

その女性を見て、私は声をあげた。

「^{アキラ}聡さん？」

「愛子様お久ぶりです」

聡さんは瞬の家で、唯一気楽に話せるお手伝いさん。

小学生の時も時々話し相手になってくれたり、

とっても優しいメイド（お手伝い）さん。

瞬と一緒に元いた家に帰っていたと思ってたんだけど、

またこっちに帰って来ていたんだ

瞬は聡さんには、少しだけ心を許しているみたい…

ちよっぴり悔しいけど、ずっと一緒にいるお手伝いさんだもんね。

「愛子様は確か、オレンジティーがお好きでしたよね？」

「はい 覚えていてくれてたんですか？」

「勿論ですわ」

オレンジティーが好き…だって瞬が好きなの飲み物だったから。私も好きになったんだ。特に聡さんが入れてくれる

オレンジティーは、また格別なんだ
「美月様には甘いミルクティーをお持ちいたしました」
「そう言い聡さんはミルクティーを美月ちゃんに手渡す。」

「アリガトウ」

『…私と違って、瞬や聡さんには素直なのね？』

我ながら大人気ないと思いつつ、彼女を見てそう思った。

「瞬夜様にはハーブティーをお持ちしました」

「ありがとうございます」

「え？」

つい声が出してしまった。

三人は私の方を見る。

「あ…嫌…何でもない…」

「そう？」

「ごめんね？いきなり変な声出しちゃって」

「いいよ」

「構いませんわ」

苦笑いする私に、二人はそう言った。

『…ハーブティー？…オレンジティーじゃない…』

瞬？

瞬はもうオレンジティーは、飲まないの？

彼の気持ち(?)

紅茶を入れ終わると、

聡さんは焼き菓子を置いて、部屋を出ようとした。

「では、失礼し…」

「ちよつと待つて？」

「どうぞされました？」

そんな聡さんを、瞬が引きとめる。

「美月？ 天気もいいし…聡さんと少し、外で遊んでおいで？」

瞬が美月ちゃんにそう言うつと、

彼女は立ち上がり、彼の方へと近寄って行く。

「オ砂場デ遊ンデモイイ？」

美月ちゃんがそう言うつと、瞬は頭を撫でて言った。

「いいよ？」

瞬がそう言うつと美月ちゃんは少し嬉しそうにした。

それが私の見た、初めての彼女の笑顔。

「では、失礼致します」

軽く頭を下げると、彼女は美月ちゃんを連れて部屋を出て行った。

彼の気持ち（？）

瞬と二人きり…

しかもこの状況を作ったのは瞬。

私の心臓は激しく動いた。

二人が出て行くと、瞬は私の方を見る。

「…」

いつもの瞬と、どこかが違う。

「？ どうしたの？？そんな真剣な顔して…」

少し深刻な顔をした瞬は、戸惑いながらも口にした。

「実は…愛に頼みがあるんだ？」

頼み？…瞬が私に？

動揺する気持ちを押さえ、私は平然を装う。

「頼みって何？私で出来る事なら何でも言って？」

瞬の頼みなら、何でもする（聞く）よ？

「ありがとう」

私は首を横に振る。

瞬は少し躊躇いながら言った。

「実は…」

「うん」

「これからもちよくちよく美月と会って欲しいんだ…」

「え？」

「その…美月のこと知ってるの、愛だけだし…」

美月にも、姉みたいな存在がいた方が良い（必要）と思って…」

瞬は…

「だから……ゴメン…勝手なことばかり言って…」

美月ちゃんが

「でも私…」

「…」

「美月ちゃんに、嫌われてるみたいだし…」
「とつても、大事なんだね？」

その理由…

なんでか、凄く気になるよ？

私…あんな小さな子に嫉妬してる。
何か、情けないな。

「そんなことないよ」

「でも…」

「確かに、今はまだ（愛の事）警戒しているみたいだけど…
きっと心を開いてくれるよ？」

「そうかな？」

瞬は頷く。

「愛が美月に、ちゃんと心を開いたらね？」

「え？」

「愛のその不安な気持ちとかが、美月には伝わっているんだよ？」
「どういうこと？」

「あの子（美月）は、人の感情（反応）とかに、凄く敏感なんだ」
「…」

「無理かな？」

…

「ねえ？」

「なに？」

知りたい…

「なんで…瞬はそこまであの子に執着するの？」

「…」

私が聞くと瞬は口を閉ざした。

そして

「ゴメン…」

謝った。

「それは…言えない」

なんで？

「なんで言えないの？」

口が勝手に開く。

「愛…」

「私…誰にも言わないよ？」

ホントだよ？

それとも…

「なんで？」

私だから…言えないの？

「ゴメン…」

謝らないですよ。

そんなのが聞きたいんじゃない。

でも…私に謝る瞬の顔は、

凄く辛そうだった。

「ゴメン…」

「愛！？……何で愛が…」

私…

瞬にそんな顔させたくないよ。

「…私でいいなら、いいよ？」

「え？」

「美月ちゃんの遊び相手…」

「愛…」

瞬？

私待つよ？

瞬が私に言いたくなるまで、私待ってる。

「ありがとう」

私は静かに頷いた。

だってそのお願いは…私にしか出来ない事なんですよ？

なら私…喜んでするよ？瞬の為に…

彼の気持ち(?)

その帰り、瞬と美月ちゃんが家まで送ってくれた。
つていつても、近所(200メートルほど)なんだけど…

美月ちゃんは相変わらず瞬から離れようとしなない。

私の家。

瞬の家とは大違いの、玄関の前。

「送ってくれてありがとう」

瞬は首を振る。

「礼を言うのは僕の方だよ…」

瞬は申し訳なさそうに言う。

「そんな事ないよ？」

「ゴメン…」

「もう謝んなくていいって！」

私は笑顔でそう言った。

ホントに…今日の瞬は、私に謝ってばかり…

瞬もそんな時が、あるんだね？

私、そんなことも知らなかった。

「気を付けて帰ってね？」

「うん。ありがとう…また明日学校で…」

「うん」

「じゃあ…」

瞬は背を向ける。

「バイバイ…」

手を軽く上げてそう言うと、私の視界に彼女が写る。瞬の服の裾を掴みながら、彼女は横目で私を見ている。

『あの子（美月）は、人の感情（反応）とかに凄く敏感なんだ』

瞬のあの言葉が頭にチラついた。

「…」

そんな事を思い、横目で私を見る彼女を見ていたら、良く分かんないけど、自然と口元が微笑んだ。

「美月ちゃんもまたね？」

瞬の時と同様、止めていた手を再び動かして言う。

そんな私を見て美月ちゃんは目を大きくさせた。

そして微かにだけど、微笑んだ。

その小さな笑顔が、なんだかくつくつたかった。

瞬の言う通りだ…

私が彼女と本気で向き合ってたから、

彼女も私に心を開かなかっただんだね？

そんなの、当たり前なことなのに…

ごめんね？

美月ちゃん。

そんな簡単な事にも私、分かってなかったよ。

そんな私達を見て、瞬が咳くように言った。

「…そうだな…」

「？」

「愛には…いつか言えたらいいな…」

『瞬…』

そう言つて、二人は夕陽に消えて行つた。

ねえ瞬？

相変わらず私は

瞬の事、分かんない事だらけだけど…

今日、少しだけだけど…

瞬に近づけた気がするよ？

それが…とっても幸せ。

失恋（？）

その日から私は、瞬との距離が一気に縮まった。
登下校は瞬とはよく一緒に行くようになった。

（美月ちゃんの送り迎え込み）

帰りは、そのままお家にお邪魔する事も多くなった。

このまま、時間が止まればいいのに…
そんな風に想えた。

数日後の放課後。

今日もいつものようにお邪魔する。

「ごめん…ちょっと、お手洗いに行ってくるね？」

「どうぞ」

そう言っていると、私は席を立つ。

「えつとお…トイレはこつちだったかな？」

何度か来るとは言え、広い家だもん。

中々部屋の配置を覚えられない。

トイレに行くのも一苦労。

そして帰るのも一苦労。

お手洗いを済ませ、部屋に戻ろうとする。

「…」

えっと…どっちだったけ？

あ！この部屋（扉）だったけ？

私は扉を開け、中へ入って行く。

「…」

私の目は奪われた。

「…キレイ」

想わず出てしまった言葉。

そこには見知らぬ女性の、肖像画の数々。

「ここにある絵…皆同じ人だ」

幼い頃の絵もあれば、私と同じ年くらいの絵もある。

その絵は全て、同じ人が描いているようだった。

「瞬のお父さんのかな？」

確か…趣味が画（絵）を描く事だって、聞いた事がある。

じゃあこれは、瞬のお母さん？

………違う。

瞬のお母さんはこんな人じゃ無かった気がする。

あんまり会った事はなかったけど、全然違う。

じゃあ…この絵の人は…

貴女は誰なの！？

…何でかな？

私、貴女のこと、知らないはずなのに…

私…貴女を知ってる気がする。

貴女のこと、どこかで見た気がするの。

失恋（？）

私は立て掛けてあったキャンバスの裏を何気なく見た。

あ…

キャンバスの裏には、それを描いた年と日付が書いてあった。

これ…

瞬の字だ。……じゃあこの絵は、瞬が描いたの？

そういえば、小学生の頃。庭で絵を描いていた、瞬の姿を、庭の外でよく見かけた事があった。

私は再びキャンバスに目を向ける。

この日付…

××××× ×× ××

瞬と出会う前のものだ…

そして、その年数は、毎年のように綴っていた。

これは…

小学生の頃の？

「…」

春、夏、冬。

瞬がいなかった長い休みの月ばかり…

そっか…この絵を描く為に？

この人がいたから…だから瞬はいなかったんだ。

小学校卒業してからは、毎月のように描いてある…

瞬？

瞬は、どんな思いでこの人の事を描いていたの？

…目が霞む。

「貴女は…誰？」

瞬…

瞬はこの人の事を…

涙が落ちる。

瞬はこの人を…私と出会う、もっと前から…

そんな時から、この人を描き続けている。

それって…瞬がその頃から、この人を見ているってことでしょ？

瞬は、私なんかよりも…

ずっとずっと…長い恋をしたんだ。

私じゃ駄目なんだ…

こんな私じゃ…

私は…その場に泣き崩れた。

失恋(?)

それから私は、再び彼が描いた絵を見た。

あれ？

こっちに帰ってきてからは描いてない…

てことは…やっぱり、瞬はこっちにいたんだ。

でも…

…何で？

その後すぐ、私は部屋を出た。

…戻る。

でも、どうしよう…

きつと今、不細工だ。

…帰ろ。

瞬と会いたくない…

私は何とか玄関口まで辿り着き、そのまま帰った。
瞬に『急用が入った』と、一言メールで告げて…

次の日が土曜日で良かった。

私は今…瞬に会うのが怖い。

日曜日が終わり、月曜日になった頃…
私はどんな顔をしたらいい？

私…瞬の前で、また笑えるのかな？

レプリカ(?)

月曜日。

教室のドアが開く。

その瞬間、私は注目を浴びた。

皆の話声(ヒソヒソ声)が聞こえてくる。

『あれ…清水さん?』

『どうしたの?あれ?』

『さあ?』

『何かあったの?』

『でもあれ…』

そんな私の元へ近寄ってくる足音。

「愛子!?!どうしたの!?!」

朝海…

「ちよつとね?…やっぱ、変かな?」

朝海は少し驚いていたけど、首を横に振って言った。

「全然…寧ろ可愛くなったんじゃない?」

可愛い…

「ありがとう…」

初めて、言われた言葉かも…

なんだか、少しくつぐつたい。

頭の両端で止めていた髪を下し、

少し明るめの茶髪。

ただまっすぐに下していただけの前髪も、

右から左へと分けた。

いつも限界まで閉めていた、制服のボタン。
上からふたつ程、胸元が見えるか見えないかぐらいまで開けた。
膝下まであったスカート。
何重にも折って、膝上まで上げた。

如何にも、真面目そうに見えていたメガネ…
コンタクトにした。
慣れない下手くそなメイク。
見よう見まねでした、初めてのメイク…

長さは足りないけど、
あの人と同じ髪型（前髪込み）。
あの人とみたいに、明るい黄色じゃないけど、明るい茶色。
あの人みたいに、胸も無いし、ナイスバディー（セクシー）でもないけど…
少しだけ外見を派手にした。

少しだけ…自分を変えてみた。

…全部、あの子の真似だけ。

私、分かったんだもん。

私みたいなお子ちゃまじゃ…駄目だった事。

彼に…少しでも近付きたいから…

そんな中、瞬が登校して来た。

レプリカ(?)

再び教室のドアが開いた。

振り返ると、そこにいた人と目が合う。

「…瞬」

瞬は私に気付くと、珍しく、目を大きくさせた。
そして、瞬は少しの間、そのままだった。

「……………ミヨサン!?!?…」

「え?」

私のその一言で瞬は八つとす。

そして、何事もなかったかの様に自分の席へと向かう。
私の横を通り過ぎた瞬は、明らかにいつもと違った。

瞬は平然を装っていたけど、動揺していたのが、その時伝わった。

瞬?

…さつき、私を見て、何て言ったの?
良く聞こえなかったよ?

その後、瞬からメールが届いた。

「昼休み…ちょっといいかな?」

「いいけど…u.u?」

学校での、瞬とのメールの遣り取り。

用件だけの短い内容だったけど…初めてだった。

昼休み。

私は瞬に呼ばれて、屋上に行った。

屋上には誰もいなく、瞬と二人きり。

そんな中、瞬が言った。

「なんかあつたの？」

「え…」

瞬は私と目を合わさない。

「ほら…この前、急に帰っちゃったし…」

何か…いつもと違うから…」

なんで…

「ちょっと…可愛くなりたくって…やっぱり変かな？」

…

『どうしたんです？その頭？』

『変？』

『変じゃないけど…』

…

「変じゃないよ？」

「そう？よかった…今更イメチェンなんかしちゃったから…変に思われたのかと思った…」

瞬は切なそうに軽く微笑んでいた。

…

『綺麗なでしょ？…この色』

『そうですね…でも、また何でそんな明るい色に？』

『ピ・ミ・シ』

『え？』

『この色はね？私の夢なの』

『夢？…その色が？』

『ええ…素敵でしょ？』

…

「瞬？」

「……………あ……………」

「大丈夫？」

「うん…大丈夫だよ……………」

瞬は悲しそうに私を見つめた。

「瞬？」

「ゴメン……………」

「え？」

【フワッ】

「ゴメン……………」

そう言って瞬は私を優しく抱きしめた。

レプリカ(?)

私は今…夢を見ているの？

瞬が…

あの瞬が…

私を…抱きしめた。

瞬の腕の中は暖かった。

私の新しい日記帳？

あれから、もう何時間か経つけど、私の中でまだ新鮮に残っているの。瞬の温もりも、耳元に掛る吐息も、今あったかのように思い出せる。

レプリカ(?)

「…瞬？」

私の声で、瞬は我に返ったように、私から離れて行く。

「……ごめん」

背を向けて言う、瞬の声は僅かに震えていた。

瞬の顔は見えなかったけど、彼の耳は真っ赤になっていた。

そしてまた謝った。

瞬は何度も何度も、私に謝る。

最後に『忘れてくれ』と言って、

私の前から姿を消した。

その後、私も教室に帰ったけど、

そこに、彼の姿が無かった。

彼は私から逃げるように、そのまま早退した。

それから、瞬は明らかに、私を避けているみたいだった。

目が合うと急に逸らすし…

そんな瞬に私は、恐くて声すら掛けられなかった。

折角…少し瞬に近づけたと思ったのに…

何か今…凄く辛いよ？

…瞬？

どうしたら私達…前みたいに戻れるの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9430n/>

Unrequited love

2010年10月17日18時19分発行